日本ヘーゲル学会

第 33 回研究大会

2022 年 6 月 11 日（土）・12 日（日）

ハイブリッド開催

会場：創価大学

「大教室棟」（S201・S202 教室）

開催校責任者：伊藤貴雄（創価大学）

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236／TEL 042-691-2211（代表）

＊オンライン参加方法については別添のオンライン大会マニュアルをご参照ください。

日本ヘーゲル学会事務局

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学文学部哲学科　三重野研究室

TEL: 03-3945-7355 ｜ E-Mail: hegel-jimukk@hegel.jp

郵便振替口座: 00150-1-10718 日本ヘーゲル学会

【開催会場】

（1）個人研究発表・シンポジウム・合評会・講演・総会：大教室棟 S201

（2）会員控室：大教室棟 S202

＊大会へのオンラインでのご参加は、学会 HP 上「第 33 回研究大会特設サイト」からお願いします。パスワードが必要です。詳細は「オンライン大会マニュアル」を併せてご覧ください。マニュアルは HP 上でも随時更新予定です。

【プログラム】6 月 11 日（土）「大教室棟」（S201）

- **10 時 00 分～10 時 40 分：個人研究発表（１）**

「ヘーゲル『精神現象学』Ｂ.自己意識章にみる独我論的視座への可能性」

発表者：大西健太（大阪大学）
司会者：竹島あゆみ（岡山大学）

- **10 時 45 分～11 時 25 分：個人研究発表（２）**

「『精神現象学』感覚的確信章における「意識」と「われわれ」」

発表者：小原優吉（東京大学）
司会者：吉田達（中央大学）

- **11 時 30 分～12 時 10 分：総会**

- **12 時 10 分～12 時 20 分：研究奨励賞授賞式**

休憩（12 時 20 分～13 時 30 分）

- **13 時 30 分～16 時 20 分：シンポジウム**

「ヘーゲルと精神分析」

提題者：池松辰男（島根大学）
　　片岡一竹（新ソルボンヌ大学）
　　小川歩人（大阪大学）
基調講演・司会者：野尻英一（大阪大学）

【プログラム】6 月 12 日（日）「大教室棟」（S201）

- **9 時 15 分～9 時 55 分：個人研究発表（3）**

  「ヘーゲル『精神哲学』の豊かさとハイデルベルク」

  発表者：栗原隆 (新潟大学)
  司会者：山口誠一（法政大学）

- **10 時 00 分～10 時 40 分：個人研究発表（4）**

  「ヘーゲル『法哲学』における犯罪論――人格から主体への移行」

  発表者：久保篤史 (京都大学)
  司会者：佐山圭司（北海道教育大学）

- **10 時 50 分～11 時 50 分：劉創馥 Chong-Fuk LAU 氏講演**

  「ヘーゲル形而上学の非形而上学的解釈」

  司会者：大河内泰樹（京都大学）

  休憩（11 時 50 分～13 時 00 分）

- **13 時 00 分～14 時 30 分：加藤尚武氏特別講演**

  「科学と哲学」

  司会者：杉田孝夫（お茶の水女子大学）

- **14 時 40 分～17 時 10 分：合評会**

  田端信廣『書評誌に見る批判哲学―初期ドイツ観念論の展相』
  司会者：山口祐弘（東京理科大学）
  評者：小井沼 広嗣（岐阜聖徳学園大学）
  松岡 健一郎 （同志社大学）
  辻麻衣子（清泉女子大学）

【個人研究発表 1 要旨】

ヘーゲル『精神現象学』B.自己意識 章にみる独我論的視座への可能性

大西健太（大阪大学）

本発表では、ヘーゲル『精神現象学』の B.自己意識の前半部分、「生命」論から「承認をめぐる闘争」を経て「主人」としての「自己意識」と「奴隷」としての「自己意識」との関係が生じるまでの範囲を取り上げる。先行する A,意識「力と悟性、現象と超感覚的世界」にて、それ自身の内に「区別」を含みながら、同時に「統一」を維持しているような一個の全体、「無限性(Unendlichkeit)」としての実体が定立され、主体は、客体から区別された「意識」から自らを対象とする「自己意識」へと発展した。そこから、「形態化」、「形態」の「自立性」を否定しようとする「欲望」、「主人」と「奴隷」との間に成立する第一の非対称的な「承認」へと続く。ここでの記述に関しては、 Lukács (1948)から Pinkard (1996)や Pippin(2008)に至るまで、特にそれを、複数の主体が社会関係を構築し、完成させるに至る過程とみなす立場が主流であった。(飯泉, 2017) 確かに、「承認をめぐる闘争」や「主人の支配」と「奴隷の隷属」、そして「労働」の作用を通じて明らかになるこれら両者の本質的な逆転といった諸「契機」は、世界史のプロセスに対応させることが可能であるとともに、実際にヘーゲル自身が、上に挙げたような諸要素を自らの「体系」に取り込んでいく際には、このプロセスとの連関においてそうしたというのが真実であろう。しかし、それらは「体系」の構成要素となる際、それに適した解釈を与えられることによってまさに「契機」となり得たのである。要するに、「契機」となっているものはすべて、まさしくそのことによって、ヘーゲルに独自の意味合いを付与されているのだと考えられる。

こうした視点に立って先の「自己意識」章前半部分を考察するならば、そこにはある種の「独我論」への視座が、さらに言えば、この「独我論」と複数の主体を前提して成立する社会的、共同体的視点とを接続する可能性が見出されうるのではないだろうか。この、一見すると意外に思われるかもしれない考察の内容が、本発表が主題とするところである。

構成としては、まず、「無限性」としての実体を介して個々の「自己意識」の間に本質的な同一性が成立していること、次に、そこから、「〈自己意識〉が〈自己意識に対して〉存在している(Es ist ein Selbstbewußtsein für ein Selbstbewußtsein)」、あるいは、「(…)、絶対的な実体は、(…)、〈私たち〉である〈私〉、〈私〉である〈私たち〉である(absolute Substanz, …, Ich,das Wir, und Wir, das Ich ist.)」という一文は、言わばどこにアクセントを置くかということに関して二義的であることが指摘され、結論として、個々の主体の複数性と統一としての単一性とが交差する一点が見出される。先行する章の展開も踏まえ、本来的に単一である「無限性」として定立された実体という、より普遍的な概念における、「私」と「他者」(他の「私」)との論理的一致がここで成立していると考えられるわけである。

【個人研究発表２ 要旨】

『精神現象学』感覚的確信章における「意識」と「われわれ」

小原優吉（東京大学 D1）

『精神現象学』が描く「意識の教養の歴史」の端緒をなすところの「I 感覚的確信、あるいはこのものと思い込み」（以下、感覚的確信章と略記）は、後の章に比べて明快な議論が提出されているとして、しばしば解釈者に評価されている。その理由の一つとして、そこで記述される、〈「いま」と「ここ」の弁証法〉と呼ばれる一連の議論において極めて具体的な場面が想定されており、またそこにおいて主題となっている意識主体や対象の形態が後の章に比べ複雑ではないことが挙げられるだろう。それゆえに、多くのコメンタールにおいて、もっぱら意識が得る経験を中心にした同章の議論が再構成されている。本発表では、このような意識の経験、具体的には「いま」と「ここ」をめぐる「言明」および「指示」の問題を中心とする解釈に対し、「意識」と「われわれ」の視点の違いへ注意を向けるならば、同章は注釈者が評価する以上に複雑な構造を有しているということを指摘する。このような「意識」と「われわれ」の関連を解きほぐすことによって、『精神現象学』および「意識の経験の学」の叙述の方法を考察することが本発表のねらいである。

本発表の構成は以下の通りである。まず第一節では、感覚的確信章において主題となっている「感覚的確信 sinliche Gewißheit」と呼ばれる意識形態がどのようなものであるかを解釈する。ここで特に着目すべきは、ヘーゲルが「感覚的確信」という語を用いる多くの場合にこの語を定冠詞で修飾しているのに対して、一箇所のみ不定冠詞を用いて「ある現実の感覚的確信 eine wirkliche sinnliche Gewißheit」というフレーズを用いていることである。このテクスト上の発見に基づいて、ヘーゲルが感覚的確信を二つの様態、つまり〈われわれからみた感覚的確信〉と〈感覚的確信自身からみた感覚的確信〉に区分していることを示す。

第二節では、前節において指摘した感覚的確信の二つの様態について、その絡まり合いを解きほぐすために以下の二つのことを行う。一つ目は、ヘーゲルが両者を区別する際に用いている基準を特定することである。ここでは、両者の区別が、感覚的確信の「本質 Wesen」に関する「われわれ」と「意識」の立場の相違に基づいていることを確認する。二つ目は、「本質 Wesen」という区別の基準を視野に入れつつ、同章における「言明」および「指示」をめぐる意識の経験を解釈する。ここで明らかになるのは、二つの様態の感覚的確信の区別に基づいているがために、意識の経験が二段階において記述されているということであり、さらに意識の経験の進行によって感覚的確信の二種類の様態は連続的なものとして描かれているということである。

最後に第三節では、以上の議論に基づいて感覚的確信章から示唆される「意識の経験の学」の叙述方法について考察する。この際着目するのは、第二節で判明した〈感覚的確信という意識形態はもっぱら「実在 Wesen」、すなわち対象の対象が有する本性によって特徴づけられている〉ということであり、Koch（2008）による存在論と認識論の関連に着目した「意識の経験の学」の方法論についての議論を手がかりとしながら、『現象学』における「意識」と「われわれ」の関連について考察する。

【シンポジウム：ヘーゲルと精神分析】趣意説明

司会：野尻英一（大阪大学）

2022 年度大会のシンポジウムは大阪大学未来共創センターおよび科研費研究プロジェクトとの共催シンポジウムとして、広い視野からフロイト、ラカンらの精神分析／精神病理学とヘーゲル哲学との関係を考える。若手研究者を中心に学会外の研究者も招聘してシンポジウムを構成し、ヘーゲル哲学のアクチュアリティを問う機会としたい。

二十世紀アレクサンドル・コジェーヴの『精神現象学』講義がフランス思想界に衝撃を与え、その影響下にフロイトの精神分析を解釈して独自の知見と技法を構築したジャック・ラカンの思想は、現代にも続く仏ポストモダン思想の重要な核を構成している。二十一世紀に入り現代思想界のトップを走るスラヴォイ・ジジェクの思想は、ラカン思想とヘーゲル哲学の融合を特徴とする。ラカン派精神分析の受容したヘーゲルは、ジジェクの手によって再びヘーゲル研究者に差し戻され、評価を待っているとも言えよう。今回のシンポジウムは、そうしたヘーゲル解釈の最前線への橋渡し、あるいは開かれつつある沃野への最初の一歩となることを意図している。

シンポジウムでは、最初に司会の野尻英一がプレゼンテーション「ヘーゲルと精神病理学／精神分析」を行い、本シンポジウムの基調をなす観点を提示する。池松辰男氏（島根大学）は、ヘーゲルの心理学や精神病理への知見が見られる「精神哲学」研究を専門とする。池松氏には提題１として、今日的観点からみて、ヘーゲル哲学のなかに、フロイトやラカンの精神分析の視点とつながる部分があるかどうかをヘーゲル研究の立場から論じていただく。片岡一竹氏（新ソルボンヌ大学）は、ラカン研究を専門とされ、精神分析の実践経験もあり、初期「超自我」概念を中心とするフロイト研究にも取り組んでいる。片岡氏には提題２として、ラカンあるいはフロイトの立場から、ヘーゲル哲学との関係を論じていただく。小川歩人氏（大阪大学）は、デリダ研究を専門とされ、特に初期デリダにおけるヘーゲル、フロイト、現象学の位置づけなどの研究実績がある。小川氏には提題３として、フロイトとヘーゲルの両者を現代的な視点から読み語るデリダの視点から、ヘーゲルとフロイトの関係を論じていただく。

短いクロスコメントの後、フロアに開いたフリーディスカッションを行う。

【提題１（要旨）】

ヘーゲルにおける主体と言語—ラカン・デリダとの接点をめぐって

パネリスト：池松辰男（島根大学）

ヘーゲルの思考を現代の哲学・思想、わけても精神分析と結び合わせることはどこまで可能か。またその一方で、精神分析を一つの哲学的思考として読み解くことはどこまで可能か。——本提題に求められているのは、ヘーゲルの側から、この双方の問題に接近するための橋を架けることである。本提題においてはその鍵として、ヘーゲルの言語論における主体と言語の関係に着

目することにする。

本シンポジウムでヘーゲルとともに主役となるラカンとデリダは、直接の関心や文脈こそ違うものの、少なくとも主体と言語の関係に再考を促すという点にかけては、軌を一にしていたと言えよう。すなわち――やや単純化して言うなら――前者は言語が主体を超えて〈他者〉のうちにあることを示し、後者は従来の存在理解の前提にある意識への現前のありようを検証する鍵として、いわゆる「音声ロゴス中心主義」には還元されない言語のありように着目することになるのである。そしてそのさい――他の提題者によっても示されることになるように――、この両者の言語論がともに、ジャン・イポリットの『論理と実存』におけるヘーゲルの言語論解釈に直接的／間接的に影響を受けているという点は、特筆に値する。その限りでは、1950～70 年代のフランスにおける精神分析や哲学内部での言語論の試みは、ヘーゲルの言語論のポテンシャルを示すものとも捉えうるわけである。

それでは改めて、今日のヘーゲル哲学研究の観点からみて、ヘーゲルの言語論にはどれだけのポテンシャルがあるだろうか。本提題はこの問いにまず一石を投ずるべく、イエナ期からベルリン期にかけての、複数のテクストに分散して現われるヘーゲルの言語論を総合して、その特徴や変遷を概観することを試みる。ヘーゲルにとって言語は、一方ではみずから記号を創造して恣意的に分節化する構想力（「ファンタジー」）の働きの現れであり、その活動には所与の直観に負わない自由がある。だが他方では、その活動は一つの習慣（「機械的記憶」）とならない限り完成せず、またその形成と解釈は不断に所与の他者との関係のうちに晒されてもいる。――そのなかで、言語を持つ主体であることは、ヘーゲルにとって最終的にいかなる意味を持つことになるのだろうか。本提題は最後にその点についての示唆を『精神現象学』等のうちに探りつつ、ヘーゲルの示す主体と言語の関係の全体像の、少なくとも一端に迫りたいと思う。

【提題２（要旨）】

ラカンにとってヘーゲルとは何だったのか―《他者》としての言語と分裂としての人間

パネリスト：片岡一竹（新ソルボンヌ大学）

ジャック・ラカンは精神分析家でありながら、自身の理論構築にあたって哲学を重要な参照項においていたことで知られている。中でもヘーゲル哲学は、1950 年代前半のラカンにとって特権的な地位にあった。しかし従来視線が向けられてこなかったのは、ラカンによるヘーゲル読解の下地となった二十世紀フランスにおけるヘーゲル受容の特殊性である。フランスにおいて本格的なヘーゲル受容が始まったのは二十世紀の初めと遅く、それゆえにそれはキルケゴールやマルクスに代表される反ヘーゲル主義を前提とした上での「ヘーゲルへの回帰」の体をなし、そこではいわば、止揚され、自らに還帰した新しいヘーゲル像が産み出されていた。

特にラカンとの共著出版が予定されていたアレクサンドル・コジェーヴは『精神の現象学』や『イエーナ体系草稿』を読解の中心に置き、《自然》の所与存在に対する否定行動によって駆動する弁証法的運動をエレメントとする対自存在としての《人間》を剔抉することにより、『エン

チクロペディー』に象徴されるような体系的哲学者としてのヘーゲル像を一新した。コジェーヴによるこうしたヘーゲルの「人間学化」は、ラカンにおける「分裂した主体」の重要な着想源の一つとなっている。

だがラカンにおけるヘーゲル哲学の影響はコジェーヴ経由のものに止まるわけではない。『論理と実存』においてコジェーヴ的な人間学への偏重を修正し、『現象学』と『大論理学』の有機的連関に焦点を当てたジャン・イポリットは、ラカンのセミネールの聴講者でもあった。同書においてイポリットは、《論理(ロゴス)》を語ること(レゲイン)、すなわち言語の問題として捉え、その運動を《実存》(＝人間）の道具としてではなく、それを超克する《論理》そのものの自己展開として捉えることで、暗にヘーゲルの論理学と後期ハイデガーの言語哲学（「存在の住処」）の宥和を図っており、こうした言語観はラカンにおける《他者》としての象徴的な言語活動(ランガージュ)と共鳴する。

本発表ではコジェーヴに加えて、従来『現象学』の仏訳者ないし注釈者としてのみ捉えられ独自の議論が充分に顧みられてこなかったイポリットに注目し、彼らがラカンに与えた影響、さらにラカンが彼らの議論を換骨奪胎しながら精神分析独自の文脈の中に取り込んでいった経緯を明らかにする。

【提題３（要旨)】

去勢のシミュラークル、あるいは一般化されたフェティシズム：デリダにおけるヘーゲル哲学と精神分析への関心について

パネリスト：小川歩人（大阪大学）

フランスの哲学者ジャック・デリダは「人間の終末＝目的」(1968）において、戦後フランスにおいて支配的であったヘーゲル、フッサール、ハイデガーに対する人間学主義的読解を端的な誤読だと断じた。こうしたデリダによる批判的視点は、アレクサンドル・コイレがヘーゲル研究のお粗末さを吐露した 1930 年のフランスとは異なる。つまるところ、フッサール現象学研究から自身のキャリアを出発したデリダは、メルロ=ポンティやジャン・イポリットのような先行世代に代表される、実存主義、マルクス主義、科学認識論、精神分析解釈が入り混じる戦後フランスの領域横断的な知的雰囲気およびその成果を批判的に引き受けることで、同時に自身のヘーゲル解釈を展開していたのだった。

20 世紀フランスというコンテクストにデリダのヘーゲル解釈を置き入れながら、本発表は精神分析との関係をあつかうにあたって、『弔鐘』(1974）におけるフェティシズムという主題をとりあげたい。『弔鐘』においてデリダは思弁哲学の百科全書的視線が包括しつつも、その中心から排除したもの、止揚されるがままにならない諸契機に注目している。デリダは、ヘーゲルが精神の歴史から排除したアフリカのフェティシズム＝物神崇拝という段階に注目している。ヘーゲルは、『歴史哲学講義』において、シャルル・ド・ブロスによる最初期の「厳密に」宗教的な意味でのフェティシズム概念を参照しつつ、アフリカ黒人の宗教の特徴に言及したが 、デリダはフ

ロイトの 1927 年の論文「フェティシズム」を参照しつつ、精神分析的フェティシズムの議論を接ぎ木する。ヘーゲルによる歴史「以前的」段階の放逐は文化的レイシズムとして批判されるものであるが、『弔鐘』においてデリダはむしろフェティシズムを西洋の心性の只中にみてとったフロイトの言説を介して、拾い上げ直し、これを一般化されたフェティシズムとして思弁哲学の全体へ再展開を試み、止揚されてゆくものと止揚されざるものの決定不可能なエコノミーを思考しようとするのである。こうした『弔鐘』におけるデリダの読解方針は、いわゆる戦後フランスにおける反ヘーゲル主義とは異なり、ヘーゲルの多形性を最大限に引き立てようとする批判的解釈である。本提題では、以上のような仕方でデリダの視点をひとつの事例とし、ヘーゲル哲学と精神分析の交差的解釈の可能性についての視座を提示したい。

【招聘パネリスト紹介】

片岡一竹 （Ichitake KATAOKA）

新ソルボンヌ大学および早稲田大学大学院文学研究科在学。ジャック・ラカン研究を専門とする。早稲田大学における修士論文では 1930-50 年代フランスにおけるヘーゲル受容を扱う。2019-21 年日本学術振興会特別研究員として「フランスのヘーゲル受容との関係を主軸としたジャック・ラカンの主体概念の研究」を研究。修士課程在籍中に単著『疾風怒濤精神分析入門』（誠信書房、2017 年）を刊行。大学院文学研究科総代も務める。『ラカン入門』（ちくま学芸文庫、2016 年）などの著作で知られる精神分析家向井雅明氏の主宰する東京精神分析サークルで企画運営を担当。最近は初期フロイト研究にもとりくむ。

https://researchmap.jp/ikataoka

ktoki00@gmail.com

小川歩人（Ayuto OGAWA）

大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構特任講師。博士（人間科学）。ジャック・デリダ研究を専門とする。博士論文「ジャック・デリダの初期思想における L'imagination の問題」（2022 年：大阪大学）。デリダにおけるヘーゲル、フロイト、現象学の扱いを中心に研究。論文に「分散と組織化の界面としての身体――デリダにおける Leiblichkeit 解釈について――」「デリダ『幾何学の起源』「序説」における「文学的対象の理念性」の在処」など。日仏哲学会若手研究者奨励賞受賞（2019 年）。

https://researchmap.jp/ayutoogawa

ogawaayuto2021@gmail.com

【共催】

・文部科学省・日本学術振興会科研費「ASD（自閉症スペクトラム障害）の病理学知見を用いた哲学的構想力概念の再構築」JP19K21612

・大阪大学人間科学部付属未来共創センター・哲学の実験オープンプロジェクト

【個人研究発表３ 要旨】

ヘーゲル『精神哲学』の豊かさとハイデルベルク

栗原隆（新潟大学・人文社会科学系・フェロー）

ヘーゲルのハイデルベルク滞在は、２年余りという短期間で、ベルリンへと赴くことになる。しかし、『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』に比べると、格段の豊かさを持つヘーゲルの『精神哲学』は、むしろ、ハイデルベルクで培われたように思われるのである。とりわけ、後年の『エンツュクロペディー』で大幅に拡大される「人間学」での考察の深み、そして具体的な内容を一挙に豊かにする『美学』を顧みるなら、その思いはますます強くなる。

1822 年のベルリンでの「精神哲学講義」ので感覚の獲得をめぐる講述である。「私たちは距離を、感官を通して持つのではありません。距離は視覚の感覚のうちにはないからです。むしろ私たちは距離を、推論することによって、さまざまな現象を比較することによって学ぶのです。子どもは望みうる限りのものすべてを掴もうとします。治療を経た後に、どんなものでも、自分から同じだけ離れているように見えた先天盲の話しにおいて、同じことが分かるでしょう」（GW.XXV-1,S.54)。モリヌー問題に連なるチェセルデンによる報告を踏まえた、新生児における距離知覚の獲得についての分析である。しかしながら、推論によって距離を測るという見解は、チェセルデンによる報告から逸脱しているようにも思われるうえに、そもそも１３歳の盲目の少年に施した開眼手術の報告と、新生児による距離知覚の獲得の問題とは、まったく別の問題であることを振り返るなら、ヘーゲルの講述に疑問を拭いきれない。またチェセルデンによる報告については、もとよりシュルツェの匿名著書『エーネジデムス』（1792 年）が詳しい（Vgl.Aenesidemus,230f.）にもかかわらず、ベルリンでの講義までに、論及が見られないことにも不思議さが残る。この謎を解く鍵は実に、ハイデルベルク大学での人脈にあった。

ヘーゲルと、彼を迎えたハイデルベルクでの人脈との結節点は、ボアスレ兄弟の弟、Sulpiz Boisserée（1783－1854）であった。ヘーゲルとボアスレ兄弟との接点の始まりは、バンベルクで新聞の編集者をしていたヘーゲルの様子について書き送った、ドロテーア・シュレーゲルによる 1808 年 8 月 20 日付けのズルピッツ・ボアスレ宛書簡から確認できる。ヘーゲルがニュルンベルクに滞在していた時には、ズルピッツはしばしばニュルンベルクを訪ね、時には、ヘーゲルと一緒に、近郊の古風な街を調査したり、教会を視察したり、広大な庭園を散策したりしたと伝えられている（Vgl. Sulpiz Boisserée：Tagebücher. Bd.I,(1978) S.330　u.Vgl.Friedrich Strack：HEGELS PERSÖNLICHKEIT IM SPIEGEL DER TAGEBÜCHER SULPIZ BOISSERÉES UND DER LEBENSERINNERUNGEN C.H.PAGENSTECHERS. in: Hegel-Studien. Bd.17（1982) S.28)。

そうしたボアスレが、ヘーゲルのハイデルベルク大学教授就任に、蔭で尽力したのは自然の流れだったのかもしれない（Vgl.. Sulpiz Boisserée：Briefe. Bd.I,（1862）S.306)。ハイデルベルクでは、折に触れ、二人は語り合ったようである。1817 年 2 月 2 日の二人の会話では、「本来の芸術は、つまりは神的なものから発していなければならず、宗教なくしては存立しえない」（Otto Pöggeler：HEGEL UND DIE SAMMLUNG BOISSERÉE. In：Hegel-Studien. Bd.35）(2000) S.133)という見地からボアスレは、ヘーゲルがハイデルベルクでの「美学講義」で語ることにな

る「絶対的な芸術」という、イェーナ時代から引き継いだ理念を、「幻想」であって、「瓦解しかかっている」（Sulpiz Boisserée：Tagebücher. Bd.I,（1978）S.380：Vgl..Andreas Grosmann：ORTE HEGELS UND HEGEKS ORT-―Bemerkungen zur Topologie des Idealismus. in：Hegel-Studien. Bd.28 (1993) S.68f.）と切って捨てたことも伝えられている。

実際、ハイデルベルクでのヘーゲルの「美学講義」は極めて生硬で貧弱だったと推定されている（栗原隆「物語の内在化と心の表出――ドレスデン探訪に寄せて、ヘーゲルにおける絵画論の成立を考える」（栗原隆編『感性論』東北大学出版会、2014 年、277－304 頁））。従って、「たとえ彼らは敬意に満ちて出会い、学問的にはむしろ近いものがありながら、内面では違いを残したままであった」（Vgl.Friedrich Strack. S.31）ともされている。とはいえ「ボアスレとの経験がヘーゲルの後の美学にとっての重要な基礎となっている」（Vgl.Friedrich Strack. S.28）のも事実である。

そうしたハイデルベルクでの人脈が、ヘーゲルの『精神哲学』の深みや、『美学』の豊かさに、いかに結実するに到ったのかを、本発表を通して明らかにすることを目指す。

【個人研究発表 4 要旨】

ヘーゲル『法哲学』における犯罪論――人格から主体への移行

久保篤史（京都大学）

本報告の目的は、ヘーゲル『法哲学』「第一部 抽象法」の最後「第三節 不法」で展開される犯罪論において「第二部 道徳性」への移行がどのような論理でなされているのかを明らかにすることにある。意志が段階ごとに姿を変えていく様を描いていると言える『法哲学』では、抽象法での意志形態は「人格」、道徳性でのそれは「主体」と呼ばれるから、本報告の目的を言い換えれば、人格から主体への移行の論理を明確にすることである。クルト・ゼールマンなど先行研究のほとんどは本報告が取り組む『法哲学』の該当箇所を刑罰論（刑罰はいかに正当化されるか）の一環として扱っており、移行の論理を解明しようとしたものは皆無と言っていい。しかし、このことは、これまでの論者の誰もが問題の移行を難なく理解できたことを意味するのではない。むしろ、多くの論者は問題の移行を「刑罰する意志に主体を見出す」という形で容易に理解できると思い做しただけであり、先行研究の断片から推測されるこうした移行の理解は首肯できるものではない。本報告では、これまで注目されてこなかった抽象法から道徳への移行に関して、「復讐する意志に主体を見出す」という別の解釈が提示される。

この解釈を導くにあたって重要な点は二つある。第一に、議論の前提にあたる抽象法の枠組みから許容し得ない移行の解釈、つまり、刑罰する意志で移行が生じているとする従来の解釈を排除することである。簡潔に言えば、そもそも刑罰は、裁判という社会制度と裁判官という主体を前提とするから、あらゆる規定を捨象されて純粋な自己関係だけになった人格を論じる抽象法では成立し得ず、よって、第一部から第二部への移行が刑罰する意志で生じているとする解釈は論点先取の誤りを犯していており不適切だということになる。なお、この点を論じるなかで、多くの先行研究が取り組んでいる刑罰論の解釈においては、ディヴィッド・クーパーが提示する解釈こそがもっとも正確であることが派生的に示される。

二つ目の重要な点は、ヘーゲルが挙げる三つの不法の一つである犯罪が「強制」という点で他の不法から峻別されていることである。不法節は「A. 悪意なき不法」、「B. 詐欺」、そして「C. 強制と犯罪」の三つに分かれている。注目すべきは、C の表題が単に「犯罪」ではなく、わざわざ「強制と犯罪」とされていることだ。ヘーゲルのドイツ語表現に注意を払いながら C の記述を正確に読み解くことにより、まさに犯罪が強制であるからこそ、人格の主体への移行が生じることが明らかになる。

本報告では以上の二点から、「復讐する意志に主体を見出す」という解釈の妥当性を示す。

【劉創馥 Chong-Fuk LAU 氏講演】要旨

Eine nichtmetaphysische Deutung der Hegelschen Metaphysik

（ヘーゲル形而上学の非形而上学的解釈）

Chong-Fuk LAU（チョン＝フック・ラウ：香港中文大学）　cflau@cuhk.edu.hk

Hegels System, wie es in der Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften dargestellt wird, ist als Ganzes ein System der Metaphysik, aber Metaphysik im eigentümlichen Hegelschen Sinne. Hegel wird öfter als ein dogmatischer Metaphysiker angesehen, der die angeblich von Kant heruntergerissene traditionelle Metaphysik wieder aufzubauen versucht. Aber Hegels Metaphysik ist in Wahrheit keine traditionelle Metaphysik, sondern das, was Hegel als spekulative Philosophie bezeichnet. Hegels spekulative Philosophie befasst sich als „Denken des Denkens“ nicht unmittelbar mit der objektiven Welt, sondern entwickelt sich als eine metatheoretische Theorie, die die philosophischen Begriffe zum Gegenstand hat, die für das Denken der Welt notwendig sind.

Die metatheoretische Stellung der Hegelschen Metaphysik zeigt sich besonders deutlich in Hegels wiederholter Betonung der Einheit oder Identität von Logik und Metaphysik, die allerdings oft als eine These der Metaphysierung der Logik (miss-)verstanden wird. Hegels Revolution besteht vielmehr darin, die Identität von Logik und Metaphysik umgekehrt als die Logisierung der Metaphysik zu verstehen. Immerhin heißt das grundlegende Werk der Hegelschen Metaphysik Wissenschaft der Logik und nicht Wissenschaft der Metaphysik! Derjenige, der Hegels logische Metaphysik am besten versteht, ist kein anderer als sein größter Rivale und Kritiker, Schelling. Schelling wirft Hegels Philosophie als „die bloß logische und negative Philosophie“ vor, die den Übergang zur substantiellen positiven Philosophie verfehlt hat. Ich stimme Schelling darin vollkommen zu, dass Hegels Philosophie bloß logisch und negativ ist, aber eben darin sehe ich im Gegensatz zu Schelling den entscheidenden Vorteil der Hegelschen Philosophie. Als eine negative Philosophie bietet Hegels logische Metaphysik, so werde ich im Vortrag argumentieren, ein wahrhaft offenes und dynamisches System, das bis heute noch lebendig und hoch relevant sein kann.

『エンツュクロペディ』で呈示されているヘーゲルの体系とは、全体として形而上学の体系であるが、しかしそれはヘーゲルの固有の意味での形而上学である。ヘーゲルは、しばしば、カントによってこき下ろされたといわれる伝統的な形而上学を再構築しようとした、独断的な形而上学者だと見なされている。しかし実際には、ヘーゲルの形而上学とは伝統的な形而上学ではなく、彼が思弁哲学と呼ぶものである。「思惟の思惟」としてのヘーゲルの思弁哲学は、直接的に客観的世界とかかわりあうのではなく、世界の思惟に必然的な哲学的諸概念を対象にするようなメタ理論的な理論として展開される。

ヘーゲル形而上学のメタ理論的な立ち位置は、特に、彼が論理学と形而上学の統一や同一性を何度も強調することにはっきりと表れている。しかしながら、このことは、論理学を形而上学化するテーゼだとしばしば（誤って）理解されている。そうではなく、反対に、ヘーゲルの転回〔革命〕の本質は、論理学と形而上学の同一性を形而上学の論理学化として理解することにある。何といっても、ヘーゲルの形而上学の基本的な著作〔のタイトル〕は、論理の学 Wissenschaft der Logik であり、形而上学の学 Wissenschaft der Metaphysik とは名づけられてはいない〔のだから〕！ヘーゲルの論理学的な形而上学を最もよく理解した人は、彼の最大のライバルにして批判者であったシェリングに他ならない。シェリングは、ヘーゲルの哲学が実体論的で積極的な哲学への移行をし損なっているとして、それを「たんなる論理的で消極的な哲学」として非難する。私は、ヘーゲルの哲学がたんに論理的で消極的なものであるという点ではシェリングに完全に同意する。しかし、シェリングとは反対に、まさにこの点のうちにヘーゲルの哲学の決定的な利点があるように思う。本講演で私は、ヘーゲルの論理的形而上学が、消極哲学として真の開かれた、ダイナミックな体系を提示しており、この体系が今日までなお生き生きとした、非常に重要なものでありうることを主張したいと思う。

（訳：久冨峻介　京都大学大学院）

【加藤尚武氏特別講演「科学と哲学」】要旨

１、ガウスは非ユークリッド幾何学の発見を隠していた。しかしその同じ時期に,たまたま彼と関係のあったふたりそれぞれ大発見を発表した。1823 年 11 月 23 日、ガウスの長年の友人ヴォルフガング(ファルカシュ)・ボヤイの息子ヨハン(ヤーノシュ)・ボヤイが、父宛ての手紙にこう書いた.「何もないところからまったく新しい世界を作り出しました。」同年,ロシアのカザンに住むニコライ・イヴァノヴィッチ・ロバチェフスキーは,幾何学に関する未刊の教科書のなかで、平行線公準が成り立たないとするとどうなるかを考察した。

２、非ユークリッド幾何学の成立は、数学の現代化の出発点でもあった。ガウスなど数学者の考え方は、ユークリッド空間も、非ユークリッド空間も、含んでしまうような空間一般の形式を定める抽象化である。非ユークリッド空間が「直観に与えられるか否か」は問題にしない。非ユークリッド幾何学は、ユークリッド幾何学に修正を加えたのではなく思考法そのものを根底から変えるパラダイム転換であった。

３,「幾何学の基礎概念は前もって定義され説明されることなく、公理によって間接的に定義されるものとなった。公理は自明なる真理たる意味を失い、あるいはわれわれの経験を表現するものたるを要せず、それは池ただ学問建設のために必要なる基礎概念の間の関係を定める仮定にす

ぎなくなった。したがって点、直線、平面といっても、これが必ずしもわれわれの直観的な点、直線、平面に限ることを要しない。与えられた公理を満足する限りにおいて、それはいかなるものであってもよいのである。まさに「テーブル、椅子、ビールコップ」であっても差支えないわけである。」中村幸四郎『ヒルベルト幾何学基礎論』解説

４、経験主義的な直観、カント主義的な形式的直観、フッサールの現象学的直観のどれとしても、ヒルベルトの幾何学には適用できない。既成の哲学のどの枠組みにも納まらない数学固有の方法がはじまった。ロックも、カントも、ヘーゲルも、フッサールも沈黙を強いられる。発言できるのは、ゲーデルだけ。ラッセル、ホワイトヘッドについては、問題が残る。マッハ 1838-1916 に頼るのは間違いのもと。これが２０世紀初頭の哲学状況だった。哲学の端境期。

５，プラトン主義の三段階
プラトン主義は、１、プラトンの初期、中期著作では、輪廻転生のアニミズムに組み込まれていた。輪廻転生の神話と密接に結びついていた。
２、キリスト教文化のなかではプラトン主義は「離在霊魂」の働きを支える重要な論点であった。数学や法律の知識を表現するのにプラトン主義が好都合であった。
プラトン主義は、３，非ユークリッド幾何学の成立以降の、輪廻転生、離在霊魂を認めない存在感のなかでも、数学的プラトン主義（ペンローズ）となって生き延びた。

６，ヘーゲル：神と国家
１、ヘーゲル：神＝絶対と、国家＝主権＝絶対を内在的に同一化する愚かなこころみ、
　　ナショナリズム（国家至上主義）の過ちの核心を純粋に概念化している
２、ヘーゲルの国家論をカントの平和論で克服しなくてはならない。（平和論以外のカントは捨てていい。カント哲学：俗悪な中身にペダンティックな形式。平和論では「戦争はまっぴら」という庶民感覚が生きている。）
３、あらゆる国家は国家以上の真理（人権と環境倫理）を分有しなくてはならない。

７、哲学史には真理がない
　歴史は記録の方式であるが、われわれは歴史を生きてはいない。私は DNA としてはアリストテレスと同時代人であり、大気中の炭酸ガス濃度としては産業革命で隔てられている。近代化と近代の超克と言う「歴史の流れ」は存在しない。
「デカルトの二元論の影響が近代思想を形成した。」
「カントは英国の経験論と大陸の合理論を批判的に統合した。」
「ヘーゲルは哲学体系を完成し、観念論は絶頂に達した。」
これらは反論可能と言うよりは、虚偽である。大学の哲学の授業ではもっとひどい虚偽が「哲学史」として語られている。高校の教科書でも哲学史についての虚偽、たとえば「ヘーゲル哲学は正反合」などが横行している。多くの哲学論文が、このような哲学史的な虚偽を真理であると偽るための間接的な援護である。たとえば「デカルトにおける心身問題」という論文が書かれれば、それは「デカルトの二元論」を間接的に支持するという文意であることが多い。こうして哲学史と言う虚偽の壁を厚くすることに哲学論文は協力している。哲学研究者が虚偽に奉仕する人生を営んでいる。以上

【合評会：田端信廣『書評誌に見る批判哲学－初期ドイツ観念論の展相』】自著紹介

本書の目的は、カント批判哲学から初期観念論への展開を哲学界の「一等星」間の単線的関係としてではなく、「星座(Konstellation)」と「星座」との複合的な対立の進展として描くことに置かれている。そのことを通して、この時期の哲学史に「拡がり」と「厚み」を与えることをめざしている。この目的を果たすために、当時大きな影響力をもっていた、ALZ は初めとするいくつかの主要な書評誌での哲学著作・論文の書評の内容が検討されている。

これまでの研究史ではあまり注目されてこなかったこれらの書評の分析、検討は、ひとつには、従来の哲学史の「定説」をより詳細に、より具体的に確証する(第二章、第四章、第一〇章など)とともに、もうひとつには、これまであまり定かでなかった「星座」間の思想的対立関係を明らかにしている(第三章、第五章、第七章、第一一章など)。

ALZ がカント批判哲学の機関誌、代弁誌であったことを実証している第一章と第二章は、総じて従来の「定説」を具体化、精密化しているにすぎないが、この部分では――すでに N・ヒンスケが説いていることだが――批判哲学の普及に果たした ALZ 編集長シュッツの役割の大きさを強調している。第三章では、シュミートの「叡知的宿命論」が、カントの意志・自由論に内在していた一契機を一面的に、極端に尖鋭化した結果生じたものであると位置づけている。

第五章は、三つの新たに登場した哲学雑誌の内容の検討を通して、カントの「批判哲学」とラインホルトの「根元哲学」の「連続性」と「非連続性」が当時の哲学界で実際どのように評価されていたのかを明らかにしている。フィヒテの初期諸作品それ自身の分析・検討はわが国の研究でも部分的に論究されてきたが、それらが当時どのように書評され、どのように受けとめられていたのかはほとんど明らかでなかった。第六章はこの研究史上の空白を埋めようとした。ニートハンマーの『哲学雑誌』を対象としている第七章は、この重要な哲学雑誌の基本的性格とニートハンマー自身の哲学的立場を規定したうえで、その第三節では「シュミート－フィヒテ論争」をその発端から帰結まで詳しく追跡している。著者はこの論争を、カント哲学に内包されていた諸性向が「経験的心理学」の方向とより純粋な「超越論的観念論」の方向へと分枝していくなかで必然的に起こった論争として位置づけている。この論争の哲学史的意味は今後もっと深く、全面的に検討、評価されるべきであろう。

第八章から第一〇章は、1790 年代前半に「道徳」論から「自然法」が独立してくる過程を実証的にトレースしたうえで、この基本的流れの中にフィヒテの『自然法の基礎』とカントの「法論」を位置づけている。フィヒテとカントの両著作は、それらに先行したこの流れを――部分的には W・ケアスティングが言及しているが――度外視しては的確に評価できないと思う。著者は、その過程におけるフォイエルバッハの『自然法の批判』の意義がこれまで正当に評価されてこなかったのではないかと考えている。第一〇章第五節では、フィヒテとカントの両著作の比較を試みているが、著者のこの比較論には当然異論が提出されうると予想している。この重要な問題の解明のために、より深い議論が起こることを期待している。

最後の二つの章は、カント正統派の代弁紙であった ALZ が一八〇〇年以降の最終局面で、新たな思想的諸潮流にどう対抗して、どのようにカントの立場を擁護しようとしたのかを実証している。

幕間 II と III は、当時のイェーナ哲学部の員外教授たちとの思想的傾向とその諸講義の概略、およびイェーナの学生たちの実態を実証的に明らかにしている。この部分は、個々の哲学研究の視野を広げるために有益な諸情報を提供している。

会場校アクセス

（下記創価大学ウェブサイトを元に作成）
交通アクセス｜創価大学｜Discover your potential 自分力の発見 (soka.ac.jp)

創価大学は、**JR八王子駅・京王八王子駅**から北へ4㎞、**バスで約20分**の位置にあります。
八王子駅へは新宿から JR 中央線、あるいは京王線(私鉄)で約 40 分です。また東海道新幹線の新横浜駅から、JR 横浜線で約 45 分です。

創価大学行きのバスには、以下の２種類があります。

① 創価大学正門・東京富士美術館行き

ひよどり山トンネル経由〔ひ 02 系統〕。
創価大学では、**「創価大正門・東京富士美術館前」**のみ停車します。

② 創価大学循環

ひよどり山トンネル経由〔ひ 04 系統〕と、八日町経由〔16 号 06 系統〕とがあります。
創価大学では、正門、創大門、栄光門の各バス停に停車します。会場に最も近いのは最初に停車する**「創価大正門・東京富士美術館前」**です。

【注意事項】
JR八王子駅北口では、時間帯によりバス乗り場が異なりますので、お気をつけください。
・始発から **12:27 までは、①・②とも「14 番乗り場」**から
・**それ以降は、①は「12 番乗り場」、②は「11 番乗り場」**から
時刻表・運賃｜路線バス｜西東京バス株式会社 (nisitokyobus.co.jp)

【参考】バス時刻表

JR 八王子駅北口発

12:27 までは 14 番乗り場から
それ以降は 11・12 番乗り場から

乗車場所	⑭番のりば		⑭番のりば
行き先	創価大正門 東京富士美術館	創価大学循環（富士美術館方面）	創価大学循環（富士美術館方面）
	ひよどり山トンネル経由		八日町経由
系統	ひ02	ひ04	16号01 16号06
時	土曜・休日	土曜・休日	土曜・休日
5			
6			37
7			52 42 26 07
8		03 18 35 55	57 42 27 07
9		13 35 55	47 27 17
10	35 55	13	47 27 07
11	13 35 55		47 27 07
12	15 35 55		47 27 07
13	15 35 55		47 27 07
14	15 35 55		47 27 07
15	15 35 55		47 27 07
16	03 15 35 55		47 27 07
17	13 35 55		47 27 17
18	13 35 55		47 27 17
19	15 35 55		47 27 17
20	35		47 27 07
21			52 27 07
22			美 27
23			

部分:⑪番の

注：黄色個所＝11・12 番乗り場から

京王八王子駅発

4 番乗り場から

行先	東京富士美術館 創価大正門（ひよどり山トンネル経由）	東京富士美術館方面 創価大学循環 ひよどり山トンネル経由	東京富士美術館方面 創価大学循環 （八日町経由）
時	土曜・休日	土曜・休日	土曜・休日
5			
6			35
7			05 24 40 50
8		01 16 33 53	05 25 40 55
9		11 33 53	15 25 45
10	33 53	11	05 25 45
11	11 33 53		05 25 45
12	13 33 53		05 25 45
13	13 33 53		05 25 45
14	13 33 53		05 25 45
15	13 33 53		05 25 45
16	01 13 33 53		05 25 45
17	11 33 53		15 25 45
18	11 33 53		15 25 45
19	13 33 53		15 25 45
20	33		05 25 45
21			05 25 50
22			美 25
23			
0			

美印：東京富士美術館行

会場校施設説明

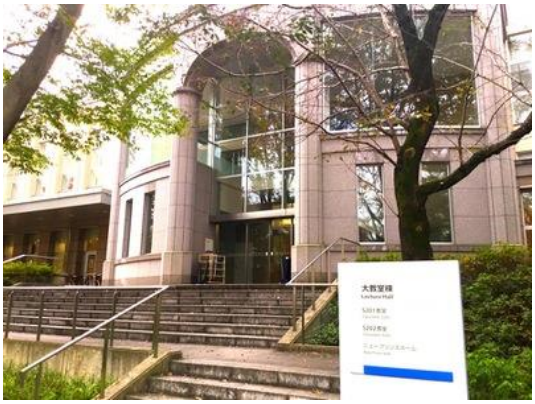
（※次頁「創価大学キャンパス案内図」も併せてご覧ください。）

【会場までのルート】

・バスでお越しの方は、バス停**「創価大正門・東京富士美術館前」**で降車してください。

創価大学正門

・正門から校内に入って坂道を３分ほど登ると、突き当たりの左手に２階建て校舎**「大教室棟」**があります。この**２階（S201・S202 教室）**が会場です。（１階は食堂です）



大教室棟

《追記》

もし「創価大正門・東京富士美術館前」でバスを降り損ねた場合には、３つ先のバス停**「創価大学栄光門」**で降車して下さい。栄光門から正門に向かってキャンパスを 10 分ほど縦断すると、正面に上記「大教室棟」が見えてきます。ただし、このルートは起伏がある上に、左右に折れ曲がっていて若干分かりにくいので、あまりお勧めしません。

なお、バスは「創価大学栄光門」を超えると、八王子駅に戻ってしまいますので、くれぐれもお気をつけください。

【昼食について】

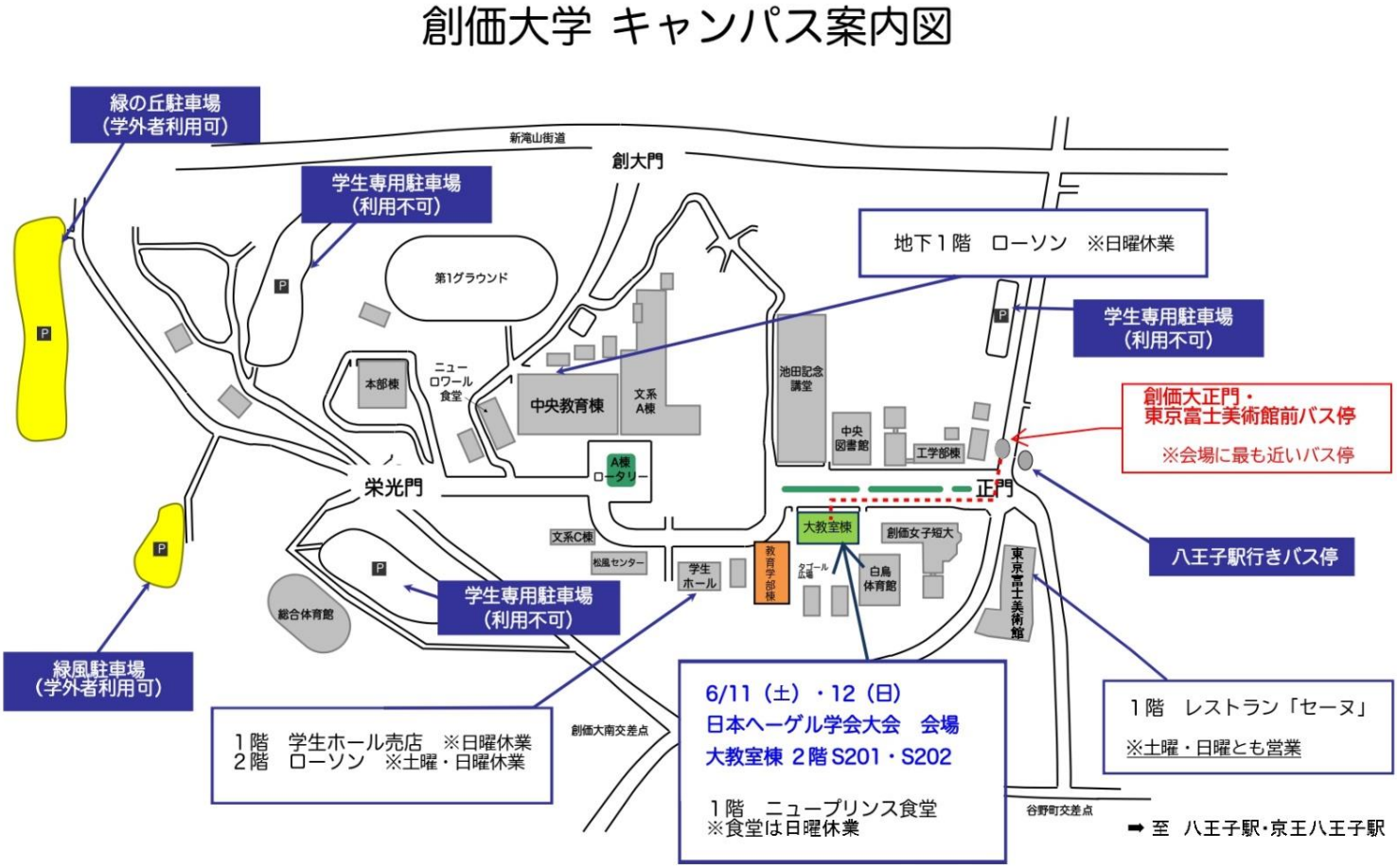
・6 月 11 日（土）は授業日のため、大教室棟１階の食堂は営業しています。ただし昼休みは学生で混み合う上、コロナ禍以降は品数が絞られており、早く売り切れる傾向にあります。したがって、昼食は基本的に各自で持参して頂くようお願い申し上げます。

・持参された昼食は、メイン会場（S201）に隣接する会員控室（S202）でおとりください。

・6 月 11 日（土）は、大教室棟から徒歩３分ほどのところにある**「学生ホール」１階売店**、および徒歩５分ほどのところにある**「中央教育棟」地下１階ローソン**は営業しています（8 時半～17 時まで）。飲み物や菓子類であればここで購入することが可能です。その他、大教室棟の１階外側にも自動販売機があります。

・6月12日（日）は休日のため、学内の食堂、コンビニ等はすべて休業しています。

《追記》正門前にある**「東京富士美術館」１階レストラン《セーヌ》**は、6月11日・12日の両日とも営業する予定です。万が一、昼食を持参できなかった方はこちらでお取りください。

東京富士美術館

※常設展示
「西洋絵画～ルネサンスから20世紀まで～」（有料）を行っています。